

## 押上石

参詣道の上にそびえる巨大な岩は、高野山の開祖である空海という僧（諡号 弘法大師、774-835）についての数多くの言い伝えのうちの一つにおいて重要な役割を持っています。

空海の年老いた母親が、息子の建造した寺院を見るためはるばる四国から空海を訪ねて旅してきました。母親は高齢であったにも関わらず山を登り始めましたが、袈裟掛石の清浄結界を過ぎたところで激しい雷雨に襲われました。母親を守るため、空海は母親がその下に隠れることができるよう、素手でこの巨大な岩を持ち上げました。岩の表面をよく見ると、手の跡に似ているへこみが見えるという人もいます。

この雷雨は、女性は袈裟掛石を超えてはならないという明白なしるしと受け取られ、空海の母は山を降りざるを得ませんでした。押上石近くの小川は、母の涙でできたと言われていいます。

町石道を行く人の多くは、この親孝行を象徴する石の前で立ち止まり、自らの母のために静かな祈りを捧げます。